

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和3年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第7号（10月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jpnp.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理, 安全使用
2. 作物に対する安全 適期, 適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川, 湖沼, 海などへの汚染防止)
(養蚕, 養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

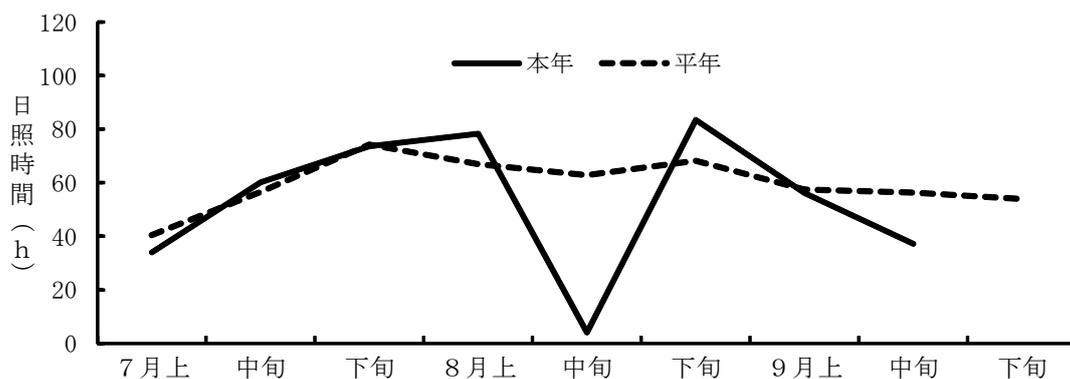
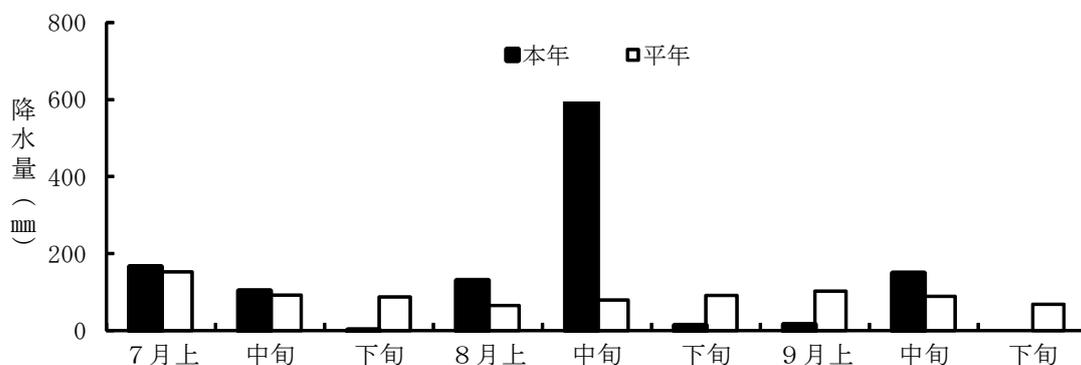
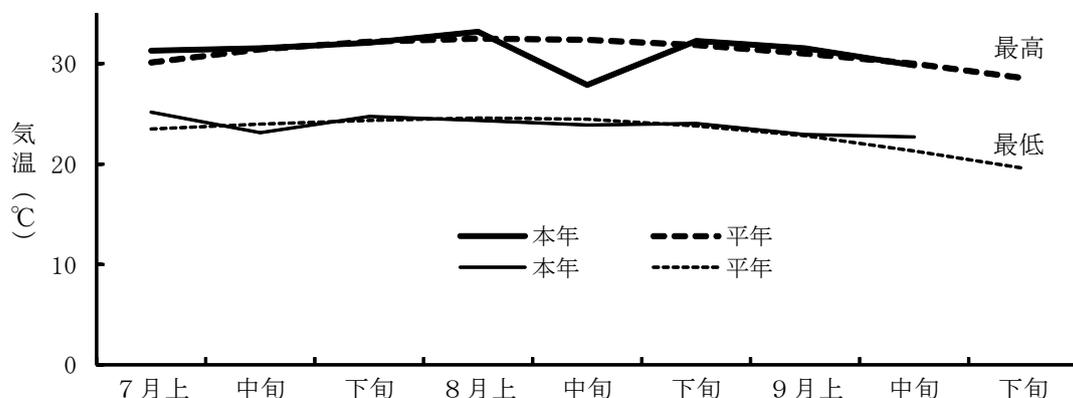
農薬の飛散(ドリフト)にも注意しましょう

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（10月2日から11月1日） 令和3年9月30日 鹿児島地方気象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	10	20	70	九州南部では、気温は平年より高く、降水量は平年並み、日照時間は平年並みか多い見込み。奄美地方では、気温は平年より高く、降水量、日照時間は平年並みの見込み。
	奄美地方	10	20	70	
降水量	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	30	30	40	
日照時間	九州南部	20	40	40	
	奄美地方	40	30	30	

II. 7～9月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量		
			現況	予報	
花き	キク	ハダニ類（県本土，施設）	やや少	並	
		アザミウマ類（県本土，施設）	並	やや多	
作物・野菜・花き共通	サツマイモ，イチゴ，キャベツ，根深ネギ，マメ類，キク等	ハスモンヨトウ	並	やや多	
果樹	カンキツ	かいよう病（県本土・熊本地域）	やや少	やや少	
		〃（奄美地域）	やや少	やや少	
		黒点病（県本土・熊本地域）	やや多	やや多	
		〃（奄美地域）	やや多	やや多	
		ミカンハダニ（県本土・熊本地域）	やや多	多	
		〃（奄美地域）	やや少	並	
		サビダニ類（県本土・熊本地域）	多	多	
		〃（奄美地域）	多	多	
		果樹カメムシ類	ツヤアオカメムシ	やや少	やや少
			チャバネアオカメムシ	やや少	やや少
果実吸蛾類	（県本土・熊本地域）	多	多		
	〃（奄美地域）	並	並		
茶樹	チャ	カンザワハダニ	並	やや多	

【病害虫発生予報】

I. 普通作物

防除に関する今月の留意事項

1. サツマイモ

(1) サツマイモ基腐病

発生が見られたほ場では、次年度の発病リスクを軽減するために、以下の防除対策を徹底する。

<本ぼ> (収穫後の残渣対策)

ア 屑イモや落梗は次期作の伝染源となるのでは場外に持ち出し、適切に処分する。

イ 僅かに残った残渣の分解を促進するため、収穫直後に速やかに耕耘等を行う。また、土壌が乾燥している場合は、灌水を行ってから耕耘する。

ウ 本病が多発し、塊根被害が目立ったほ場では、サツマイモ以外の植物を2年程度輪作または休耕する。

II. 野菜

防除に関する今月の留意事項

【施設野菜】

1. タバココナジラミ

トマト黄化葉巻病、キュウリ/メロン退緑黄化病の病原ウイルス (TYLCV, CCYV) を媒介し、サヤインゲンに白化莢、トマトに着色異常果を発生させるので、以下の点を考慮し、育苗期から定植初期の総合的な対策に努める。

(1) ハウス周辺、内部の雑草は媒介虫の生息・増殖場所になるので、定植10日前までに除草する。

(2) 侵入を防ぐため、ハウス開口部 (サイド等) には必ず防虫ネットを設置する。

なお、ハウスに寒冷紗を張る等、昇温抑制対策をできる限り行う。

(3) 防虫ネットの設置のみでは侵入を防ぐことはできないので、定植時には必ず粒剤を施用する。

(4) ハウス内には黄色粘着トラップを設置し、早期発見・初期防除に努める。

(5) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

2. 果菜類のアザミウマ類

直接的な被害をもたらす以外にウイルス病を媒介する種も存在する。これらを効率的に防除するには、育苗期から定植初期の総合的な対策に努める。

(1) ハウス周辺及び内部の雑草は発生源になるので、定植10日前までに除草する。

(2) 成虫の侵入を抑制するために紫外線カットフィルム等を利用する。

なお、ミツバチなどの訪花昆虫を使用する場合は、活動が妨げられる恐れがあるので、紫外線カットフィルムは使用しない。

(3) ハウス開口部 (サイド等) から侵入することが多いので、防虫ネットを展張するとともに、青色粘着トラップを設置し、早期発見と初期防除に努める。

(4) 防虫ネットの設置のみでは侵入を防ぐことはできないので、定植時には必ず粒剤を施用する。

Ⅲ. 花き（キク）

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土(施設)

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率30%（平年38%）

：やや低い（－）

(イ) 気象予報

気温：高い（＋）

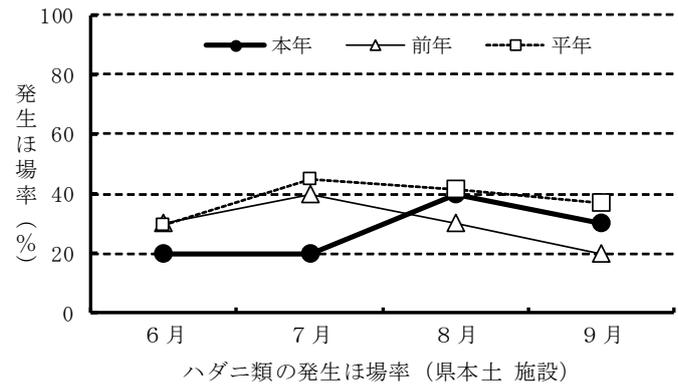
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する場合がありますので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と初期防除に努める。

(イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。

(ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



ハダニ類の発生ほ場率（県本土 施設）

(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率40%（平年31%）

：やや多（＋）

発生程度は低い（－）

(イ) 気象予報

気温：高い（＋）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) アザミウマ類はキクえそ病(TSWV)、キク茎えそ病(CSNV)を媒介するので、母株や苗の導入に際しては、本虫の寄生やウィルス感染に細心の注意を払う。

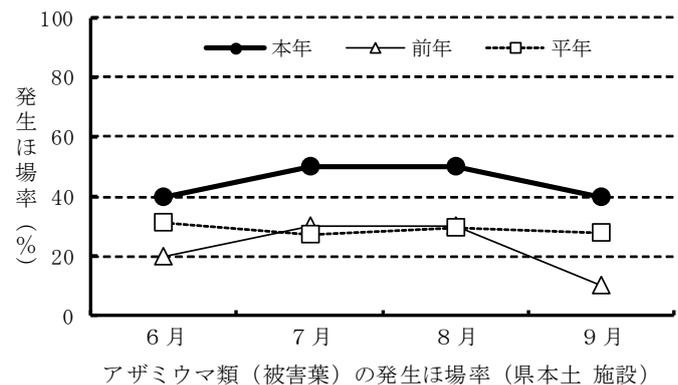
(イ) ハウスの開口部には目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。

(ウ) ハウスの開口部等に青色粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。

(エ) 除草等の環境整備を行うとともに、母株の防除を徹底する。

(オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(カ) 栽培終了後は、速やかに残渣を処分する。



アザミウマ類（被害葉）の発生ほ場率（県本土 施設）

IV. 作物・野菜・花き共通

(1) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 サツマイモ、イチゴ、キャベツ、根深ネギ、マメ類、キク等
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
フェロモントラップ誘殺数：やや多
発生程度が高いほ場を認めた（＋）

表 各品目での発生状況

作物名	発生ほ場率（％）		概 評
	本年	平年	
ダイズ	100	87	やや多
サツマイモ	2	5	やや少
キャベツ	8	25	やや少
キク	0	4	やや少

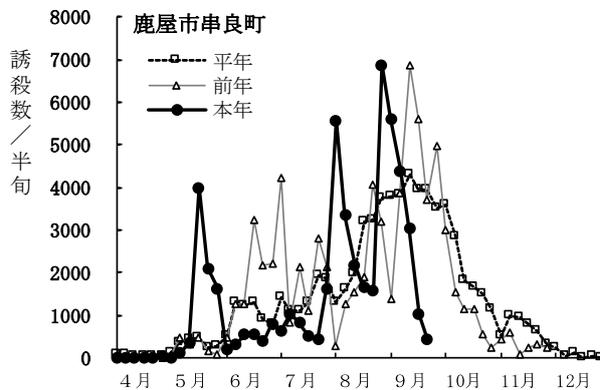
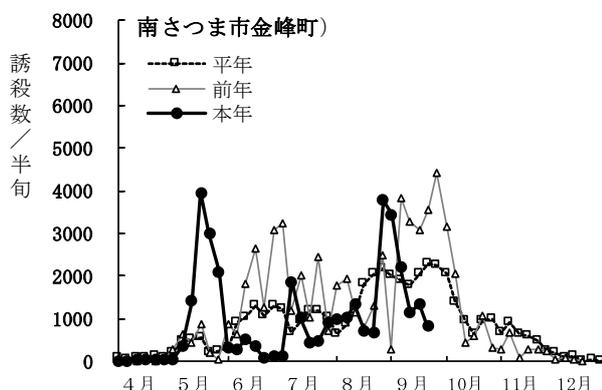
注) キクは被害発生ほ場率

(イ) 気象予報

気温：高い（＋）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 現在発生が少ない品目についても、今後はハスモンヨトウの増殖に好適な気象条件が見込まれることから、注意を要する。
- (イ) 発生状況は、作物や各地域で異なるため、ほ場を見回り、幼虫の発生状況を確認する。
- (ウ) 若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害（白変葉）するので、発生の目安にする。
- (エ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (オ) 中・老齢幼虫になると薬剤が効きにくいので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。
- (カ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布に努める。



フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺状況

V. 果 樹

1. カンキツ

(1) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) やや少

奄美地域(果実) やや少

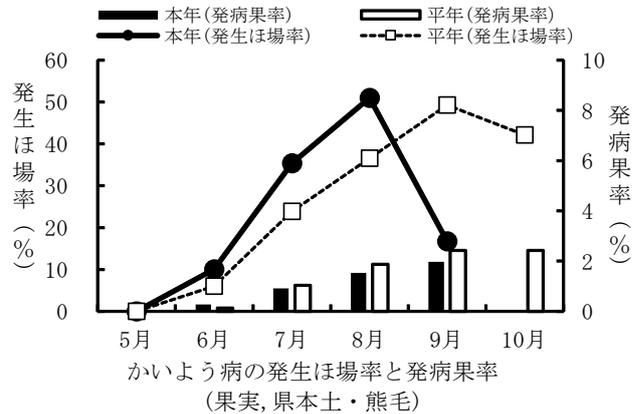
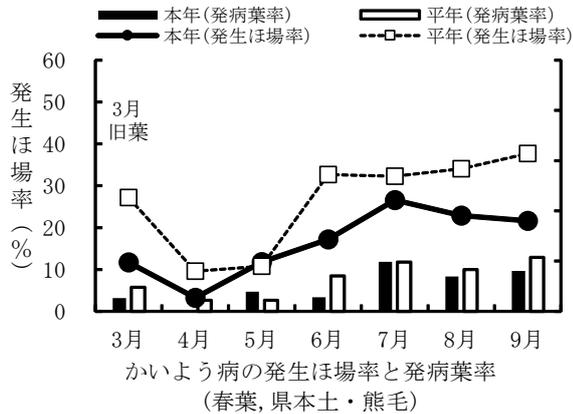
イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	やや少
発生ほ場率	21.6% (平年37.7%) : やや低い (-)	16.7% (平年49.3%) : 低い (-)
発病率	1.6% (平年 2.1%) : 並	2.0% (平年 2.4%) : 並

※果実では、発生程度の高いほ場を認めた (+)



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	やや少
発生ほ場率	14.3% (平年24.3%) : やや低い (-)	0.0% (平年22.9%) : やや低い (-)
発病率	0.1% (平年 0.3%) : やや低い (-)	0.0% (平年 0.4%) : やや低い (-)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 台風の接近が予想される場合は、3日前～前日の予防散布を行う。また、菌は降雨時に飛散・伝搬され、多雨年に発生が多いので、降雨にも注意する。

(イ) 罹病した夏秋梢やミカンハモグリガの食害を受けた夏秋梢はせん除し、伝染力の強い越冬病斑を少なくする。

(2) 黒点病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや多

奄美地域 やや多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率65% (平年51%)

: やや高い (+)

発病果率6% (平年11%)

: やや低い (-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや多

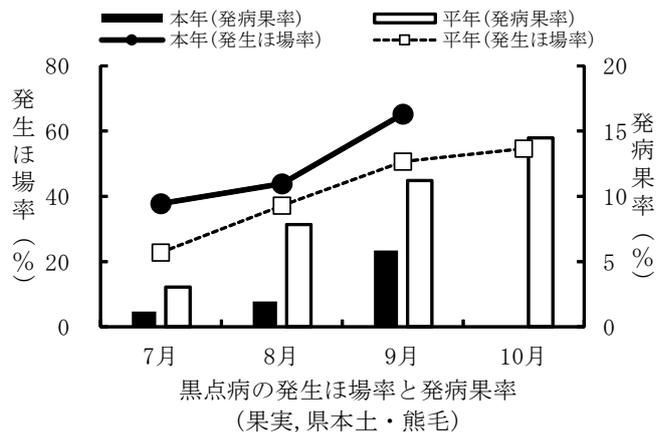
発生ほ場率43% (平年9%) : やや高い (+)

発病果率1% (平年1%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 多雨が予想される場合には予防散布を行う。

(イ) 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 多

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率35% (平年26%)

: やや高い (+)

寄生葉率1% (平年3%)

: やや低い (-)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

<奄美地域>

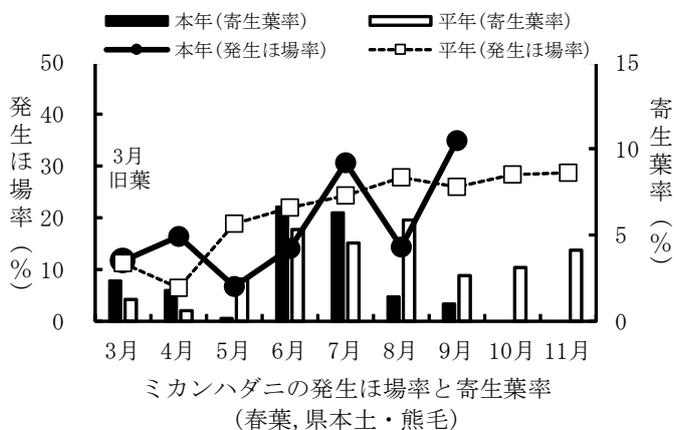
(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 0% (平年17%) : やや低い (-)

寄生葉率 0% (平年2%) : 並

(イ) 気象予報

気温：高い (+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 1葉当たり雌成虫数0.5～1.0頭（寄生葉率で30～40%）を目安に防除する。
- (イ) 同一系統薬剤の使用は年1回とし、葉裏までかかるように丁寧に散布する。

(4) サビダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 多

奄美地域 多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率17.4%（平年7.4%）

：高い（+）

被害果率 0.5%（平年0.4%）

：並

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率14.3%（平年4.3%）：高い（+）

被害果率 1.4%（平年0.2%）：高い（+）

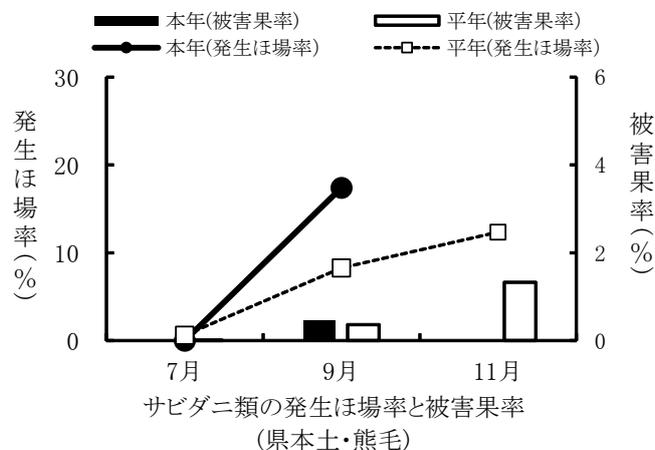
(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) リュウキュウミカンサビダニは、秋季以降も果実上で加害し続けるので、被害果を認めたら直ちに防除する。

(イ) 前年度発生したほ場では、同じほ場で発生する機会が多いので、防除に努める。



(5) 果樹カメムシ類（ツヤアオカメムシ、チャバネアオカメムシ）

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 ツヤアオカメムシ やや少

チャバネアオカメムシ やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率 0%（平年 5%）：やや低い（-）

予察灯の誘殺虫数， 9月第1～4半旬の合計 (単位：頭)

調査地点	ツヤアオカメムシ		チャバネアオカメムシ	
	本年	平年	本年	平年
南さつま市金峰町	87	617	120	745
いちき串木野市湊町	5	427	1	405
出水市美原町	100	1,996	322	12,859
鹿屋市串良町	35	189	8	181
誘殺虫数	やや少 (-)		やや少 (-)	

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 餌となるスギ・ヒノキの球果が，台風等で落果すると，果樹園へ飛来する場合がありますので注意する。

(イ) 果樹カメムシ類の飛来は地域間差，ほ場間差があるため，こまめに園内外をよく見回り，飛来を認めたら直ちに防除する。

(6) 果実吸蛾類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 多

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率32% (平年11%)：高い (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率0% (平年0%)：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 果実吸蛾類は果実を吸汁・加害し腐敗落果させる。夜間に活動し果皮の薄い早生温州等に集まりやすい。

(イ) 網目5～10mmの防蛾網で被覆するほか，幼虫の食草となるアケビ，ムベ，アオツヅラフジ等を極力除去する。黄色忌避灯を用いる場合は，ほ場全体が2Lux以上の明るさになるように設置する。

.....
防除に関する今月の留意事項

1. ナシ

(1) 黒星病

黒星病は，葉・花梗・新梢に発生し早期落葉や果実の裂果の原因となる。病原菌は枝にある芽りん片で越冬するため，芽りん片への感染を少なくするため防除が重要である。特に，本年発生が多かった園では，翌春の伝染源を減らすことが重要である。

ア 腋花芽への感染を防止するため，収穫後(10月，11月)に必ず2～3回防除する。

イ 罹病して落葉した葉は伝染源となるので処分する。

(2) ナシさび色胴枯病（令和2年度病害虫発生予察特殊報第4号（令和3年1月18日付け）参照）

夏季から秋季にかけて枝幹に発生することが多い。罹病部は表皮が灰黒色の水浸状となり、表皮から形成層に至る組織内に樹液様物が充満する。その後、樹液様物は表皮の一部から流出し、乾固して鉄さび色に変色する。罹病部の樹皮下は褐変腐敗し、アルコール発酵臭がある。罹病部の先では落葉を伴い、枝幹の一部または全体が枯死する。現在、ナシさび色胴枯病に使用可能な登録薬剤はないため、発病を認めたら以下の防除を行う。

ア 発病樹は伝染源になる可能性があるため、伐採、焼却等の処分を実施する。その際に使用した器具は消毒する。

イ ジョイント栽培では、発病樹と接続していた樹の生育をよく観察し、異常が見られたら直ちに接ぎ木部を外し、伐採、焼却等の処分を実施する。

ウ 排水性が悪い土壌では発病しやすい傾向がある。多湿条件により傷んだ根からの感染や、雨水のはね返りによる樹皮の傷口からの感染を防ぐため、排水対策を行う。

VI. 茶 樹

(1) カンザワハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率 25%（平年 29%）：並

寄生葉率 0.8%（平年 1.8%）

：やや低い（－）

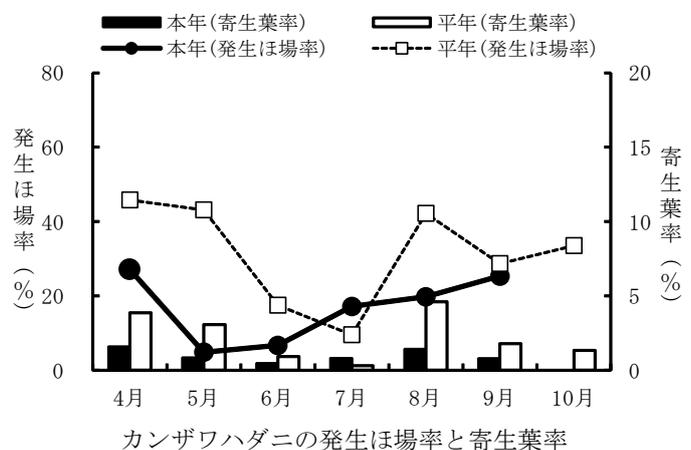
(イ) 気象予報

気温：高い（＋）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 越冬前のカンザワハダニの密度は翌春の発生量に大きく影響するので、秋整枝後に防除を行う。発生の多い園では秋整枝直後と11月中旬～下旬に防除を行う。

(イ) 薬剤は、葉裏まで十分にかかるように散布する。



防除に関する今月の留意事項

1. チャトゲコナジラミ

多発するとは場一面に成虫が乱舞し、作業性を低下させるほか、幼虫が寄生した枝ではすす病が発生し光合成能力を低下させる。

(1) 深刈り更新は、寄生葉が除去され密度低下が期待される。

(2) 薬剤防除は若齢幼虫期の効果が高い。

(3) 本虫には天敵シルベストリコバチが有効なため、本天敵に影響の少ない薬剤を使用するように努める。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り，記載された用途，方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて，適切な防除衣，保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり，流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は，住宅地および畜舎に隣接するほ場や，無風の時，土壤が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので，施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬，不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し，鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は，前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は，各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は，巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は，果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（+），（-）は，発生量の増加，減少要因を示す。
- 気象予報は，向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い，本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし，過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。